

このコーナーでは長年、市内の小中学校で教職にあつた蛭田光城さんが市立図書館発行の「成田のむかし」に執筆した成田の昔の暮らしの様子を掲載していきます。

# 炭焼き

文 蛭田光城  
ひるたみつぎ

絵 野上和彦

太郎兵衛さんと炭がまへ行きました。

「成男君、かまの中へ入ってみるか、少し汚れるけどな。」

「うん。入る。中を見たいんだもの。」

太郎兵衛さんは薪を二、三本投げ入れてから、腹ばいになって入っていききました。ぼくも続きました。中は真っ暗です。

「かまの中は、熱いんだね。」

「うん。前に使った人が、なるべく熱いうちに炭を出してくれただよ。次の人が熱いかまへつめると、炭が早く焼けるからだよ。」

話しながらかまの奥まで行きました。

「昔はな、この暗い中を手さぐりで薪をつめたんだよ。今は電灯があるけどね。」といって懐中電灯をつけました。そして両ひざをつき、片手で体をささえ、片手で薪を立てました。

「こんなふうに立っていると上がすいているだろう。そこへ細い枝をつめて、火が燃え易いようにするんよ。」

太郎兵衛さんに続いてかまの外へ出ました。

「成男君、まきを運んでくれないか。」

「うん。」

夕方近くつめ終わって火をつけました。煙は白くもうもうとでました。

「いつまで火を燃やしているの?」

「あした一日中だよ。今夜は火の番をしながらここにいます。あしたまたおいでよ。」

翌日の夕方、行ってみました。煙が空色になっていました。太郎兵衛さんは、たき口と煙突の穴を泥でふさぎました。こうして一日半置いてから炭を出すのだそうです。

炭出しの日です。泥を取り除いて炭を引き出しました。太郎兵衛さんが炭を両手に持って、たたき合うと、キーン、キーンという音がしました。「大成功」とポツンとひとこと言って、ニッコリしました。



## 編集後記

職場体験学習の取材をする中で、いろいろな事業所にお邪魔させていただきました。手取り足取り仕事を教える職場の方々の姿勢に、最初は戸惑いがちだった子どもたちの表情にも次第に笑顔がのぞいていたようです。子どもたちにとって、仕事だけでなく、人とのふれあいの大切さも実感できる機会になったのではないのでしょうか。



成田市役所本庁舎(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)はISO14001の認証登録を受けています。

平成19年12月15日号 No.1113 成田市のホームページ <http://www.city.narita.chiba.jp>